

0. 伝えたいことを伝える、“赤べこ”に思いを寄せて

災害の経験を伝えることは、災害文化という視点からすると大変重要なことです。しかし、人によっては忘れてしまいたい衝動に駆られることや時間が経過して記憶から消えてしまうということもあり、その伝え方は難しい。災害文化は、「自然災害とともに暮らしてきた経験や教訓をもとに、暮らしを守るために先人が遺した知恵や工夫、営みの集積」（文部科学省 2007）といわれるように、平常時は顕著ではないが、災害が発生すると避難行動や相互扶助といった助けるためのあらゆる行動となる潜在する行動ということになります。しかし、残念ながら、東日本大震災のことでも災害の現場でさえ、風化が進んでいるということを知ります。確かに復興ということで、さまざまに風景が変わってしまっ、一部の深い悲しみを抱いている方々を除けば毎年その時期になると明かりがともるような気はしても、過ぎればまた日常に戻ってしまいます。

自然災害の経験を何とか後世へ残さないといけないうことで、昔からさまざまな形で記録、モニュメントを代表に、物語や口承による災害教訓、防災都市計画、地域の特性に合わせた工夫がなされています。例えば、多くのものが地域に存在していたのに、現在ではその存在すら知られていない、ということも多くなっているようです。例えば、古来水害が多かったところでは分水路や輪中のような洪水を軽減するものや、平野部の農村などでは居久根のような風除け林、沿岸部では塩害や砂防のための植林というようなものですが、なぜここに存在しているのかという意味すら考えない忙しい日常になってしまいました。

それでも、様々なレベルでの防災教育は続けられていて、過去の教訓、科学技術の知識、警報や予報といった情報を主にして、講演会、講座、訓練、防災マップの配布、伝承という方法で行われています。しかし、継続性とか広く展開していくのかとかに課題があることも確かです。

2021 年新年の天皇陛下のビデオメッセージを見ていたら、大きな福島県会津の“赤べこ”の玩具が映されていました。これは、丑年だからだけではなく、この疫病退散に願ってのことだそうです。この赤べこは、地元の郷土史家の説明によると、「1611 年会津盆地西縁断層帯の活動により、大地震が発生し、阿賀川では天然ダムができて 13 村が水没し多数の被害者が発生した。マグニチュード 6.9～7.2、震度 6 強の大地震と推定されている。その時、柳津町の只見川のがけ上の福満虚空蔵菩薩円蔵寺の本堂が崩壊した。再建に当たっては、大変な急傾斜の山であり、資材を上げるにしても難渋していた時に、どこからともなく赤べこ（朝鮮牛？）の大群が来て、労役の黒牛を助けわずか 6 年で再建できたということでした。それで、赤べこの発祥地として柳津での郷土玩具は生まれ、赤色は病魔を払うということもあって健康祈願の張り子の贈り物にもなった。」ということでした。

この話から、この赤べこ、実は地震災害や豪雨災害をモニュメントとしても意味があり、健康、家内安全を背負いながら、この地で多くの人々が犠牲になったことを忘れないための供養、教訓でもあったようにも思います。また、この赤べこは首を揺らしながら、災害時には共助が大切であることも教えているような気もしました。